

# 令和元・二年度の民間所在資料保存状況調査について

―湯浅町・広川町―

藤 隆 宏

## 一 令和元・二年度の「災害の記憶」事業

本稿は、令和元年度及び令和二年度に実施された文化庁補助金事業「地域に眠る「災害の記憶」と文化遺産を発掘・共有・継承する事業」<sup>1)</sup>(以下「災害の記憶」事業」という。)のうち、和歌山県立文書館(以下「文書館」という。)が民間所在資料保存状況調査(以下「民間所在資料調査」という。)<sup>2)</sup>と位置付ける部分についての報告である。

「災害の記憶」事業は、実施主体である和歌山県立博物館施設活性化事業実行委員会(以下「実行委員会」という。)の下、和歌山県立博物館を中心に同県教育庁文化遺産課、文書館、和歌山大学、地域資料ネット「歴史資料保全ネッ

ト・わかやま」等が協働する事業である。

平成二十六年から平成三十年度までは、例年、事業対象地域を特定し、同地域内における過去の災害に関する記録、記念碑、口碑、痕跡、遺跡等を中心に、未指定のものを含む文化財の所在確認調査を行い、また、現在の自主防災組織活動等の調査も行うものであった。

しかし、令和元年度は、前年度までの調査成果を基に高校生向け啓発冊子『「災害の記憶」を未来に伝える―和歌山県の高校生の皆さんへ―』<sup>3)</sup>を発行し、県内全高校に配布することを事業の中心に据えた。したがって事業対象地域は特定されず、同冊子編さんのための調査が主に行われたため、民間所在資料調査は、過去の調査に関連する追加調査等に限られた(表1)。

令和二年度は従来の実施方法に戻し、事業対象地域を

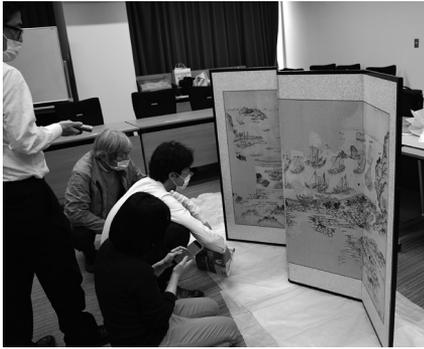


写真1 湯浅町役場での調査  
(令和2年4月15日)

有田郡湯浅町及び広川町として実施した(表1)<sup>(4)</sup>。同年、和歌山県立博物館は、広川町及び湯浅町域の資料を多数展示する夏休み企画展「生誕二〇〇年記念 稲むらの火濱口梧陵」<sup>(5)</sup>を開催した。同館は、同展覧会関連の資料調査を「災害の記憶」事業調査と兼ねて集中的に行なった。しかし、文書館等の他の機関は、令和元年度後半から深刻化した新型コロナウイルス感染症感染拡大により、特に上半期において出張・調査を行うことが困難であった<sup>(6)</sup>。したがって、令和二年度の「災害の記憶」事業の調査対

象は、公的機関が保有するものを除いては、同展覧会が採り上げた濱口梧陵・安政地震災津波に関係するものが中心となった。令和二年度の事業成果の地域への還元としては、小



写真2 広川町での現地学習会(令和3年2月27日)

冊子「先人たちが残してくれた「災害の記憶」を未来に伝える―命と文化財とを守るために―」<sup>(7)</sup>を発行して湯浅町及び広川町の全戸に配布し、現地学習会「歴史から学ぶ防災―命と文化遺産とを守る―」<sup>(8)</sup>を開催した。

両者ともに、文書館は三本ずつ計六本の報告を担当している。ただし、うち四本<sup>(9)</sup>は、文書館が令和元年度から稲むらの火の館及び県立耐久高校との協働で進めてきた各所蔵資料のデジタル化及びデジタルアーカイブ「和歌山県歴史資料アーカイブ」での公開事業等の成果<sup>(10)</sup>を報告する内容である。つまり、令和二年度の「災害の記憶」

表1 令和元・2年度「災害の記憶」事業調査等一覧

	調査実施日	調査等対象市町村	備考
1	令和元年 6月29日	広川町・湯浅町	
2	7月8日	印南町	
3	7月23日	印南町	文書館は不参加
4	7月24日	印南町	
5	7月31日～8月1日	串本町	
6	8月7日	新宮市	平成29年度事業の関連調査
7	9月4日	新宮市	平成29年度事業の関連調査
8	10月7日～11日	すさみ町・串本町・那智勝浦町・太地町・田辺市・日高川町・御坊市・美浜町・海南市	
9	10月19日	広川町	文書館は不参加
10	10月29日	御坊市	
11	10月26日～10月27日	新宮市・北山村・田辺市	
12	11月5日	紀の川市	
13	11月29日	広川町	
14	令和2年 1月15日	和歌山市	
15	1月21日	国立研究開発法人水産研究・教育機構中央水産研究所・東京海洋大学	
16	1月22日	新宮市	平成29年度事業の関連調査
17	1月26日	上富田町	文書館は不参加
18	2月2日	和歌山市	
19	1月7日	新宮市	文書館は不参加
20	2月7日	広川町	
21	2月17日～18日	千葉県銚子市	
22	4月8日	湯浅町・広川町	湯浅町・広川町との打合せも行う
23	4月15日	湯浅町	
24	4月16日	広川町	文書館は不参加
25	4月24日	広川町	文書館は不参加
26	4月28日	広川町	文書館は不参加
27	5月8日	広川町・湯浅町	文書館は不参加
28	5月13日	広川町・湯浅町	文書館は不参加
29	5月19日	広川町・湯浅町	文書館は不参加
30	5月27日	湯浅町・広川町	
31	6月2日	広川町	文書館は不参加
32	6月4日	湯浅町	
33	6月24日	広川町	
34	7月23日	広川町	文書館は不参加
35	8月19日	広川町	
36	9月2日	広川町	
37	9月4日	広川町	文書館は不参加
38	9月9日	広川町	
39	9月24日	広川町	
40	10月16日	湯浅町	
41	10月21日	広川町	
42	10月27日	広川町	
43	11月4日	湯浅町	
44	11月5日	湯浅町	文書館は不参加
45	11月11日	湯浅町	
46	11月13日	広川町	
47	11月20日	広川町・湯浅町	
48	12月4日～5日	新宮市	平成29年度事業の関連調査
49	12月9日	広川町	
50	12月16日	広川町	
51	12月17日	広川町	文書館は不参加
52	令和3年 1月24日	湯浅町	
53	1月26日	広川町	
54	2月5日	湯浅町・広川町	
55	2月9日	広川町	文書館は不参加

事業は、新型コロナウイルス感染症感染拡大により、民間所在資料調査を充分に行うことができなかったが、一方で、文書館と地域資料保存機関との協働事業の成果を地域に還元する機会となったといえる。

なお、文書館では、以上の実行委員会構成員としての「災害の記憶」事業への参加の外、独自の業務として歴史講座<sup>(1)</sup>、紀要及び『文書館だより』<sup>(2)</sup>において、従来の「災害の記憶」事業調査で確認された資料に基づく研究成果を報告している。

## 二 民間所在資料調査結果報告

以下に「災害の記憶」事業中、令和二年度の湯浅町・広川町域における民間所在資料調査の結果を報告する。調査対象となる民間所在資料とは、本来は民間で保有されたいわゆる古文書・記録類であるが、現在は公的機関に寄贈又は寄託されているものも多いことから、混乱を避けるため、以下「文書群」という。なお、本稿においても盗難防止及び個人情報保護のため、公的機関で保管

されているものを除き、原則として各文書群の内容紹介はしない。したがって概要のみの報告となる。

表2は、調査した民間所在資料調査の件数、すなわち存否・所在確認ができた文書群の数である。計一六件のうち、一四件が過去の自治体史、和歌山県教育委員会が昭和四十年から昭和五十年にかけて調査を行い刊行した『和歌山県古文書目録』(以下「目録」という)<sup>(4)</sup>及び文書館が平成九年度から平成十七年度まで実施した前回の民間所在資料調査<sup>(5)</sup>により、既に存在が知られていた文書群の再確認となる。他方、散逸が確認された文書群が一件あり、新出文書群が一件あった。

「災害の記憶」事業調査は悉皆調査ではなく、災害関係記録の調査を最優先する。民間所在資料調査としても同様である。また、特に新型コロナウイルス禍の中では、文書館としては小冊子の発行及び現地学習会の開催・報告に必要な最小限の調査にとどめざるを得なかった。したがって、存否確認ができた文書群はごく一部である。散逸が「確認」されたのは一件だけであるが、今回調査できなかった文書群のうち、少なからぬものが散逸して

いる可能性がある。

表2の今回調査できた文書群のうち、「前回調査」行の計九件が、文書館による前回の民間所在資料調査で確認されていた文書群の再確認となったものである。表3は、それら九件の文書群について前回調査と対比したもので、今回所蔵者の代替わり、保管場所の移動又は散逸が確認されたものの件数である。

表2 令和元・2年度民間所在資料調査件数

町名	全体	前回調査	散逸	新出	前回文書館調査年度
湯浅町	10	6	1		平成16・17年度
広川町	6	3		1	平成16・17年度
合計	16	9	1	1	

\*1文書群を1件としている。

表3 前回の文書館民間所在資料調査の追跡

町名	全体	代替わり	場所移動	散逸	前回文書館調査年度
湯浅町	6		3	1	平成16・17年度
広川町	3				平成16・17年度
合計	9	0	3	1	

\*1文書群を1件としている。

表4は、文書館が把握している、今回の調査対象地域を出所とし、現在は歴史資料保存利用機関に保管されている文書群の一覧である。文書群の一部でも公的機関で展示・保管されているものは掲載している。

なお、本稿では、個人宅、寺社や区の集会所等で保管されている文書群の所在情報は明らかにしない。「災害の記憶」事業を通して、未遂を含めて寺社の盗難被害を知ることが絶えず、また防犯上の理由で寺社関係者から調査成果の非公表を求められることがあるからである。残念ながら、現状では、「災害の記憶」事業成果のうち多くの部分を非公開にせざるを得ない。

最後に、両町の民間所在資料調査成果のまとめ、文書群保存・活用の課題等について述べるが、両町とも、文化財の活用が主要施策に位置付けられており、文化財の保存・活用が教育委員会のみならず首長部局の職掌ともされていた（担当職員の両部局兼務を含む<sup>①</sup>）。令和二年度の「災害の記憶」事業調査の殆どに各町職員が同行され、両町ともに積極的に調査に参加いただけた。

近年、文化財を観光資源等として活用することが重視

最終確認日	災害関係資料	現在の保管場所	一部資料を保管している公的機関
R2.4.15		湯浅町教育委員会	
-		県立図書館	
-		文書館	
R2.5.27		湯浅町教育委員会	水研図書館・神大常民研
R3.2.5	「地しんつなみ記」(安政地震)	湯浅町教育委員会	
R2.4.15		湯浅町教育委員会	
-		文書館	
-		文書館	
-		文書館(寄託)	
-		文書館	
-		-	神大常民研
R2.10.16		県立耐久高校	和歌山県歴史資料アーカイブで画像公開
R2.5.27		湯浅町教育委員会	
R2.4.15	安政地震資料5点	湯浅町教育委員会	
-		-	水研図書館
R2.5.8	「広浦大波戸再築記録」(宝永地震)	広川町役場	
-	「夏之夜かたり」(安政地震)	稲むらの火の館	和歌山県歴史資料アーカイブで画像公開
-		文書館	
-		県立図書館	
-		県立博物館(寄託)	

書群の民間所在資料調査を行ったか否かを含めて本稿では明らかにしないことを示す。

され、令和元年施行の改正文化財保護法が法的に後押しするかたちで、首長部に文化財活用を担当する課が設置される地方自治体が増加している。両町は、県内におけるかかる動向の先進自治体といえるが、少なくとも、調査への同行・参加等、文化財行政に携わる人員・業務量が他自治体よりも増加していることは間違いないと思われる。<sup>17)</sup>

#### (一) 湯浅町

湯浅町域に関する文書群で確認できたのは、公的機関所蔵のものを中心とする一〇件であった(表2)。

表3にある、文書館による前回調査後に保管場所の移動が確認された文書群三件のうち二件は、庁舎移転に伴う湯浅町教育委員会所蔵文書の移動である。千川家文書<sup>18)</sup>及び籠谷家文書<sup>19)</sup>がこれに当たる(表4)。残る一件は、圓生家文書「地しんつなみ記」である。現湯浅町湯浅の安政地震津波記録である同文書は、「災害の記憶」事業を機に湯浅町教育委員会へ寄贈された。<sup>20)</sup>

表3で「散逸」となっている一件は、災害関係記録で

表4 公的な歴史資料保存利用機関等に保管されている文書群

市町村	地区名	文書群名	目録	その他出典
湯浅町	栖原	千川家文書	II	
	栖原	栖原家文書		
	栖原	栖原角兵衛文書		
	湯浅	松宮家文書		『水産研究・教育機構所蔵古文書目録 和歌山県関係史料』 『漁業制度目録3』
	湯浅	圓生家文書		
	湯浅	籠谷家文書		
	湯浅	阿瀬誠治郎商店文書		文書館『移管資料目録』（県立図書館移管資料）
	湯浅	湯浅町船山商店文書		文書館『移管資料目録』（県立図書館移管資料）
	湯浅	川口家文書		
	湯浅	堀田家文書		
	湯浅	中尾緑家文書		『漁業制度目録3』
	湯浅	耐久梧陵文庫		
	湯浅	庄屋七郎右衛門御用留		『文化元年子八月 御用留 湯浅濱方』『寛政十三年辛酉2月 御用留 庄屋七郎右衛門』
	湯浅	山下竹三郎旧蔵資料		
広川町	広	野原茂八家文書	II	『水産研究・教育機構所蔵古文書目録 和歌山県関係史料』
	広	広川町文書	II	
	広	渋谷家文書		
	広	岩崎文彦氏旧蔵資料		
	広	濱口梧陵文庫		
	名島	能仁寺文書		『広川町誌下巻』

\* 文書群名は、『目録』又は「その他出典」欄の自治体史等で明示されている呼称である。

\* 「目録」欄の数字は、各文書群が掲載されている『目録』の号数（注14参照）を指す。

\* 「最終確認日」欄に「-」とある文書群については、公的機関に保管されているものを除き、当該文

ある。前回調査時の所蔵者は他界され、御子孫宅での現存は確認できなかった。ただし、湯浅町教育委員会が複製物を作成しており、記録内容は確認できる。

現湯浅町沿岸域では、昭和二十五年（一九五〇）十月に「漁業制度資料調査保存事業」により、少なくとも一二文書群の調査（一時借用）が行われている<sup>(21)</sup>。同事業は、昭和二十四年十月から昭和三十年三月までの間、当時の水産庁が財団法人日本常民文化研究所（当時）に委託して行われた全国漁村の調査で、同研究所から全国の漁村に調査員が派遣され、古文書を借用して東京の研究所に送って目録作成及び筆写を行い、終了したものから返却されるという作業が行われた<sup>(22)</sup>。国立研究開発法人水産研究・教育機構水産資源研究所図書資料館（以下「水研図書館」という。）及び神奈川大学日本常民文化研究所（以下「神大常民研」という。）には、同事業で作成された現湯浅町域の七文書群の筆写稿本が現存するが、表4にあるように中尾緑家文書の原本も神大常民研に所蔵されている<sup>(23)</sup>。

松宮家文書（表4）は、昭和二十五年十月に財団法人

日本常民文化研究所が借用し、うち一四七件が『松宮百合子家文書』として目録化（以下、当該目録を「旧目録」という。）<sup>(25)</sup>されている。そして現在は、八三二点の古文書が『松宮太郎兵衛家文書』として水研図書館に所蔵され、<sup>(26)</sup>明治十六年〜同二十年の日誌五点が『松宮百合子家文書』として神大常民研に所蔵されている。<sup>(27)</sup>

また、上記両松宮家文書の出所である湯浅町湯浅の屋敷が近年解体された際に湯浅町教育委員会が調査し、古文書が確認され、同委員会が寄贈を受けた。また、解体以前に親族に引き継がれていた古文書も、同委員会に寄贈された。両者を合わせて、現在同委員会所蔵の松宮家文書は約一一〇点ある。この中に、旧目録収録の古文書は二八件確認される。<sup>(28)</sup>

これら松宮家文書の整理が進んできたことから、今後湯浅地方の重要産業であった網製造業の実態が明らかになることが期待される。<sup>(29)</sup>

なお、同委員会には、古文書と共に、松宮順一殿宛昭和四十九年十二月十一日付け県史第三九号「古文書の返還について」（和歌山県企画部県史編さん室長川北哲）と

いう文書がある。これによると、「今から二〇年ほど前、東京の日本常民文化研究所が漁業制度を研究するために貴殿から借用した古文書を東京に引き上げておりました。が県史の発刊に必要なため所有者に返還するよう督促して参りました。先般来、当室から所有者に返還するよう依頼を受け県へ一括送付してきましたので御返送いたします。」とあり、昭和四十九年に一部の文書が当時の財団法人日本常民文化研究所から和歌山県史編さん班を通じて返還されていたことが分かる。

平成五年の文書館開館時に、和歌山県史編さん班から文書館が引き継いだ古文書に、かつて財団法人日本常民文化研究所が借用していた文書（「県史編さん班移管資料」のうち「樫野協議会文書」及び「小山家文書」（旧「龍王神社文書」<sup>(30)</sup>）が含まれているが、県史編さん班が保管するに至る経緯がこれまで不明であった。本発見により、両文書群とも、松宮家文書と同様に同研究所から旧県史編さん室に送付されたものであることがほぼ確実であり、他にも同様の経緯で所蔵者に返還された文書群が存在する可能性が考えられる。<sup>(31)</sup>

その他、湯浅町教育委員会が以前から所蔵している『庄屋七郎右衛門御用留』（表4）は、翻刻・刊行されている。<sup>(32)</sup>

『山下竹三郎旧蔵資料』は、昭和六年に『紀州の地震と安政大地震洪浪之記』を著し、発行した湯浅町湯浅の住民山下竹三郎（破竹）旧蔵の地震資料である。一時期湯浅町立図書館の蔵書でもあったようである。湯浅地域の災害記録の中核となるものであるといえる。<sup>(33)</sup>

県立耐久高校には、同校の歴史資料を収蔵・展示する耐久史学館があり、元東濱口家所蔵の書籍類を中心とする「耐久梧陵文庫」を所蔵している。前述のとおり、令和元年度以降の文書館との協働により、同文庫の一部は、文書館「和歌山県歴史資料アーカイブ」<sup>(34)</sup>で公開されている。<sup>(35)</sup>

湯浅町は、平成二十八年に地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律に基づく湯浅町歴史的風致維持向上計画<sup>(36)</sup>を策定し、令和三年十二月には改正文化財保護法に基づく湯浅町文化財保存活用地域計画<sup>(37)</sup>を策定するなど、文化財の保存・活用を積極的に行っている。

湯浅町文化財保存活用地域計画策定にあたって作成された湯浅町文化遺産リストには八四五件五・三五九点<sup>(38)</sup>が掲載され、うち一三八件一・三九八点を占めるのが古文書であるという。悉皆的・継続的な調査や収蔵施設の整備等、文書群を含む文化財の保存、活用等の課題及び課題解決に向けての計画等は同計画に明記されている。

県内市町村の先陣を切って文化財保存活用地域計画を策定した湯浅町の今後の実践の積み上げに期待し、また県の機関として文書館もできる限り協力したい。

今後、湯浅町と同様に県内市町村における文化財保存活用地域計画策定が進み、かつ湯浅町と同等の文化遺産リストの作成及びその更新が進んでいくのであれば、文書館の民間所在資料調査の必要性はなくなり、県内の文書群保存についての文書館の役割も変質するのではないかと。現時点で県内における文化財保存活用地域計画策定は湯浅町のみにとどまっているが、役割の変質を求められる状況が醸成されることを期待する。

## (二) 広川町

広川町では、六文書群の現状を確認した(表2)。そのうち一文書群は新出である。

現状が確認できた文書群の件数は少ないが、寺社が所有する二文書群については、継続的に調査が続けられている。

広川町は、平成二十八年に広川町歴史的風致維持向上計画を策定し、平成三十年には「百世の安堵く津波と復興の記憶が生きる広川の防災遺産」のストーリーが日本遺産に認定されている。<sup>(40)</sup> 同日本遺産の関連文化財を中心として、文化財の保存・活用を町の主要施策に位置付けているといえる。<sup>(41)</sup>

令和三年度はコロナウイルス禍のため中断したが、「災害の記憶」事業を契機に継続的調査が行われている前述の両寺社とも同日本遺産の構成文化財となっており、所蔵資料の全貌を把握することは、地域にとって意義が大きいものと認識されている。

なお、広川町域においても、漁業制度資料調査で少なくとも六文書群が調査され、うち三文書群の筆写稿本が

現存する。<sup>(42)</sup> また、野原茂八家文書(表4)については、水研図書館に原本四点が収蔵されている。<sup>(43)</sup>

また、稲むらの火の館が所蔵する渋谷家文書(表4)は、文書館との協働により、和歌山県歴史資料アーカイブで公開されている。<sup>(45)</sup>

一五、〇〇〇巻に及ぶという濱口梧陵の旧蔵書『濱口梧陵文庫』(表4)は、平成二十四年に和歌山県立図書館に寄贈されていたが、近年、日本有数の漢籍コレクションであること、梧陵の書込みが多数見られること等、多くの新事実が明らかにされている。<sup>(46)</sup> 濱口梧陵が広川町における文化財行政の中心となる存在であることは疑いないが、同文庫の整理は広川町のみならず全国的に注目・待望されている。<sup>(47)</sup>

広川町歴史的風致維持向上計画において、文化財の保存・活用を行う施設として稲むらの火の館及び男山焼会館が挙げられている(一四九頁)。両施設に加え、同計画に基づき整備されている歴史的建造物も一部を保存施設として利用すること等も視野に入れて、文書群等動産文化財についての更なる調査・収集・活用を期待する。

## 注

- (1) 令和元年度及び令和二年度の文化庁補助金事業「地域と共働した博物館創造活動支援事業」に採択された令和元年度「地域と共働して文化遺産の活用を担う博物館連携事業」及び令和二年度「みんなで和歌山の文化遺産を守り活用する博物館連携事業」を構成する事業のうちの一つとして実施された。実施主体は和歌山県立博物館施設活性化事業実行委員会である。平成二十六年年度「地域に眠る」災害の記憶」の発掘・共有・継承事業」としてスタートしたが、平成二十七年以降は災害関連資料以外の文化財所在確認も重視した「地域に眠る」災害の記憶」と文化遺産を発掘・共有・継承する事業」となり、令和三年度まで連続して文化庁補助金事業に採択されている。(文化庁「地域と共働した博物館創造活動支援事業」ウェブサイト <https://chikikokyodo.bunka.go.jp/index.html>)、「和歌山県立博物館における文化庁補助金事業報告」(「和歌山県立博物館ニュース」<http://kenpakunews.blog120.fc2.com/blog-entry-571.html>) 令和四年一月四日アクセス)
- (2) 民間所在資料調査の目的及び「災害の記憶」事業との関係性については拙稿「平成二十六年年度の民間所在資料保存状況調査について―御坊市・美浜町・日高川町・那智勝浦町―」(和歌山県立文書館紀要「第十八号、平成二十八年」、平成三十年年度までの事業成果については同稿、「平成二十七年、平成三十年の民間所在資料保存状況調査について―由良町・印南町・すさみ町・太地町・串本町―」(「同」第二十号、平成三十年)及び「平成二十九年・三十年度の民間所在資料保存状況調査について―日高町・白浜町・新宮市・北山村―」(「同」第二十二号、令和二年)を参照。
- (3) 和歌山県立博物館編「実行委員会、令和二年(同館ウェブサイト)でも公開 <https://www.hakubutu.wakayama-c.ed.jp/saigai/2019book.pdf>」令和三年十一月三十一日アクセス)
- (4) 調査員は次のとおり(職名は当時)。この他調査ごとに協力参加した方がいる。
- 前田 正明 和歌山県立博物館主任学芸員  
木村 修二 神戸大学大学院人文学研究科特命講師(令和二年度参加)  
砂川 佳子 文書館文書専門員  
玉置 将人 文書館副主査(令和二年度参加)  
浜田 拓志 歴史資料保全ネット・わかやま会員(奈良文化財研究所埋蔵文化財センター客員研究員)  
松下 正和 神戸大学地域連携推進室特命准教授(令和二年度参加)  
松原 瑞枝 和歌山県教育庁文化遺産課技師  
藤 隆宏 文書館主査
- (5) 令和二年七月十八日、八月二十三日開催(展覧会ウェブサイト <https://www.hakubutu.wakayama-c.ed.jp/goryou/frameset.htm>) 令和四年一月四日アクセス)
- (6) 文書館は令和二年四月二十五日から五月七日まで臨時休館となり、その後も調査等の出張は極力控えざるを得なかった。調査を実施する際も、参加人数を極力少なくすることとなり、他機関との共同調査を控えることもあった。
- (7) 和歌山県立博物館編「先人たちが残してくれた「災害の記憶」を未来に伝えるVI―命と文化財とを守るために―」(湯浅町・広川町)「実行委員会、令和三年(同館ウェブサイト)でも公開 <https://www.hakubutu.wakayama-c.ed.jp/saigai/minibook202001.pdf>」令和三年十一月三十一日アクセス)
- (8) 現地学習会の内容は次のとおり。なお、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、両会場とも一般参加者人数は会場定員の半数に絞った。また、各報告の動画は <https://www.youtube.com/playlist?list=PLCqUN14-R4HTaDjNukRmvC39ws40Qcd> (令和四年一

月三日アクセス)。

現地学習会「歴史から学ぶ防災二〇二〇―命と文化遺産とを守る―」

・令和三年二月二十七日(広川町役場、一般参加者五四名)

・令井正展氏(広川町企画政策課長)「広川町の歴史町づくり」、崎山光一氏(稲むらの火の館館長)「濱口梧陵と稲むらの火の館」、阪本尚生氏(印南町立印南中学校「渾身の災害ルポルタージュ」安政聞録に描かれた広・湯浅の津波被害)、「砂川佳子」「広村永遠の救済策―濱口梧陵による安政南海地震からの復興―」、新井美那氏(和歌山県立博物館学芸員)「安楽寺の文化財―歴代住職ゆかりの書画を中心に―」及び松原瑞枝氏「廣八幡宮の文化財と守り伝えられた法華経」

・同年二月二十八日(湯浅えき蔵、一般参加者六七名)

・山本隆重氏(湯浅町教育委員会文化財調査員)「湯浅町の文化財に関する取組」、前田正明氏「一七〇七年宝永地震津波と湯浅・広」、藤隆宏「一八五四年安政地震津波の記憶を後世に伝えるために」、中原七菜子氏(湯浅町教育委員会)「湯浅町域の文化財について」、越智信也氏(神奈川大学日本常民文化研究所)「湯浅町の漁網製造と漁業」(新型コロナウイルス感染症拡大防止のためビデオ報告)及び玉置将人「耐久高校の歴史と耐久史学館」

(9) 前掲注(7)小冊子のうち「濱口梧陵と安政南海地震の記憶」

(一〇)、「一頁」及び「耐久高校の歴史と耐久史学館」(一四頁)、前掲注(8)現地学習会のうち砂川報告及び玉置報告

(10) 砂川佳子「令和元年度「和歌山県歴史資料アーカイブ」収集資料の紹介」(「和歌山県立文書館だより」第五八号、令和二年、<https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/monjyo/kanko/layori/layori58.pdf>)、玉置将人「県立耐久高校所蔵「耐久梧陵文庫」の保存と活用」(「和歌山県立文書館紀要」第二十三号、令和三年、[https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/monjyo/kanko/kiyou/kiyou23\\_tamaki.pdf](https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/monjyo/kanko/kiyou/kiyou23_tamaki.pdf))

(11) 松原瑞枝氏・藤隆宏「日高町小浦浄土院の焼火地蔵と漁師」(令和二年八月二十一日)。ただし、当初令和元年度歴史講座として令和二年三月四日開催予定であったが、新型コロナウイルス感染症感染拡大のため中止となり、令和二年度歴史講座として改めて開催された。)

(12) 拙稿「日高町津久野の宝永安政津波記録と紀州藩の「日銭」徴収―塩崎家文書より―」(「和歌山県立文書館紀要」第二十二号、令和二年)、「湯浅村における安政地震津波への対応と教訓の継承」(「同」第二十三号、令和三年、[https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/monjyo/kanko/kiyou/kiyou23\\_tou.pdf](https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/monjyo/kanko/kiyou/kiyou23_tou.pdf))

(13) 拙稿「復元された土砂災害の被災遺物と記念石碑―新宮市熊野川町九重の「漂水之器」―」(「和歌山県立文書館だより」第五六号、令和元年、<https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/monjyo/kanko/layori/layori56.pdf>)

(14) 『目録』は、和歌山県教育委員会が昭和四十年から昭和五十年にかけて「県下各地に所在する古文書類について、散逸・亡失を防ぐため所在情報を緊急に調査し、現状の実態を把握して、保存対策の基本計画の策定に資することを目的に」実施した調査の成果で、計一冊にわたり合計七十二件の文書群の目録が掲載されている。湯浅町・広川町域の関連目録は、「和歌山県古文書目録Ⅱ 有田川流域古文書調査報告書」(昭和四十四・四十五年調査、昭和四十七年刊)及び「同一〇 県下古文書調査報告書(追録)」(昭和五十年調査、昭和五十七年刊)を参照。

(15) 拙稿「民間所在資料保存状況調査結果報告」(「和歌山県立文書館紀要」第十二号、平成十九年)

(16) 湯浅町地方創生ブランド戦略推進課、広川町企画政策課

(17) 和歌山県内における改正文化財保護法をめぐる議論は、「特集 改正文化財保護法と和歌山の文化・文化財の未来」(「和歌山地方史研究」第七八号、二〇一九年)を参照。

- (18) 千川家文書は、中性紙段ボール一箱分、四九点が目録化されている。栖原村里方の検地帳写(元禄十一年)等がある。文書館の前の調査を機に湯浅町教育委員会に寄贈されたものか(後掲注(37)四九頁参照)。
- (19) 籠谷家文書は、木箱一箱に入れられている。濱口梧陵の書翰もある。文書館の前の調査を機に湯浅町教育委員会に寄贈されたものか(同前参照)。
- (20) 前掲注(12)拙稿「湯浅村における安政地震津波への対応と教訓の継承」参照(地しんつなみ記)は「資料(4)」
- (21) 調査員網野善彦及び速水融が古文書を採訪して回った。財団法人日本常民文化研究所「漁業制度資料目録 第三集 全国篇二」(一九五一年)には、一二件の採訪先と各文書群の目録が掲載されている。
- (22) 越智信也「漁業制度資料調査保存事業」と資料の整理・保存の経過」(「中央水産総合研究所所蔵古文書(漁業制度資料)の概要」全一〇〇資料群の概要と収集・整理の経過) (独立行政法人水産総合研究センター中央水産研究所、平成十八年(国立研究開発法人水産研究・教育機構ウェブサイトでも公開 <http://nri.sfra.affrc.go.jp/book/hist-docs/gaiyou/gaiyouhtml/g05.pdf>) 令和四年二月二日アクセス) 一〇一～一五頁
- (23) 『国立研究開発法人 水産研究・教育機構中央水産研究所所蔵筆写稿本(漁業制度資料)の概要』一六二～一六四頁(<http://nri.sfra.affrc.go.jp/book/hist-docs/hisshaz/0530.pdf>) 令和四年二月二日アクセス
- (24) 前掲注(21)目録八五～九一頁収録の中尾緑家文書のうち、番号二七及び五一の文書の二点(平成二十九年三月十三日～十七日の神大常民研調査により確認)。ただし、同日録では湯浅町湯浅が出所とされるが、中尾家は早くとも明治期まで有田郡北湊村(現有田市港町)にあったと思われる。なお、神大常民研ウェブサイトの所蔵資料一覧リスト(<http://jominken.kanagawa-u.ac.jp/books/mgqct0000000dexo-atf/koplrv0000002xt.pdf>) 令和四年二月三日アクセス)では「中尻みどり家文書」と表記されているが、誤りである。
- (25) 前掲注(21)目録七七～八五頁
- (26) 『水産研究・教育機構所蔵古文書目録 和歌山県関係史料』(<http://nri.sfra.affrc.go.jp/book/hist-docs/mokukoku12/mokukoku12.html>) 令和四年二月三日アクセス
- (27) 平成二十九年三月十三日～十七日の神大常民研調査により確認
- (28) 番号一、二一、二七～三一、三六、四一、四五、四六、九七～一〇〇、一〇二～一〇四の各文書
- (29) 松宮家は、屋号は網屋(「松見屋」の表記も文書に散見される)。といい、当主は代々太郎兵衛を名乗り、漁網の製造販売及び網漁業を営んでいたようである。文書から、幕末には紀州藩御仕入方から「網芋御問屋」として指定された網屋仲間の名を連ね、御仕入方施策に関わったことが分かる。また、明治二十八年から同三十八年頃まで湯浅町議会議員を務めていたことが確認される(「湯浅町誌」(湯浅町役場、昭和四十二年)、前掲注(8)越智氏報告、越智信也「松宮太郎兵衛家文書」史料の概要と特色」(前掲注(26)目録)。後掲注(37)湯浅町文化財保存活用地域計画において、湯浅町の歴史文化の特徴から「湯浅はなし」という二つのストーリーを作成し、各ストーリーに関連する文化財を関連文化財群と設定し、それらの保存・活用を計画している。ストーリーの一つに「湯浅の海が育んだ漁業・製網技術」があり、松宮家文書は当該ストーリー関連文化財群の構成文化財とされている(一〇四～一〇七頁)。
- (30) 文書館「収蔵史料目録四 移管資料目録」(和歌山県、平成二十二年)
- (31) 当期の財団法人日本常民文化研究所と旧泉史編さん室との関係については、網野善彦「古文書返却の旅」(中公新書、一九九九年)一〇～一二頁参照。

- (32) 御用留第二集編集委員会「寛政十三年辛酉二月 御用留 庄屋七郎右衛門」(湯浅町教育委員会、平成十四年)、湯浅濱方文書「御用留」編集委員会「文化元年子八月 御用留 湯浅濱方」(湯浅町教育委員会、平成五年)
- (33) 「山下竹三郎旧蔵資料」は、前掲注(12) 拙稿「湯浅村における安政地震津波への対応と教訓の継承」で取り上げた「地震津浪之記」(資料⑤)、「嘉永七年大地震記」(資料⑥)及び「宝永四年の大潮」(資料⑧)の他、「築浪忘れ冊」及び木版刷りの瓦版「嘉永七年寅十一月 大坂大地震大津浪」を含む。
- (34) [https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/monjyo/archive/komonjyo/taikyu\\_goryo\\_bunko/index.html](https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/monjyo/archive/komonjyo/taikyu_goryo_bunko/index.html)
- (35) 前掲注(10) 参照
- (36) <http://www.town.yuasa.wakayama.jp/publics/index/130/> 令和四年二月三日トクヤス
- (37) <http://www.town.yuasa.wakayama.jp/files/lib/11/1049/202112151913004138.pdf> 令和四年二月三日トクヤス
- (38) 同前三九・四〇頁
- (39) <https://www.town.hirogawa.wakayama.jp/kyouiku/reki/shibunka/rekimachi.html> 令和四年二月三日トクヤス
- (40) 日本遺産「百世の安堵」特設サイト <https://hyakusei-no-ando.com/> 令和四年二月三日トクヤス
- (41) 前掲注(8) 平井氏報告
- (42) 前掲注(23) 書一六四・一六五頁
- (43) 前掲注(26) 目録
- (44) [https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/monjyo/archive/komonjyo/inamura\\_shibuya/index.html](https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/monjyo/archive/komonjyo/inamura_shibuya/index.html)
- (45) 前掲注(10) 砂川記事
- (46) 松本泰明「近世・近代移行期の大蔵書 和歌山県立図書館所蔵「濱口梧陵文庫」(『和歌山県立図書館紀要』第二十三号、令和三年 <https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/monjyo/>

[www.lib.wakayama-c.ed.jp/monjyo/garally/panelx2/index.html](https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/monjyo/garally/panelx2/index.html))、和歌山県立図書館松本泰明「濱口梧陵生誕二〇〇年記念県立図書館・文書館合同展示「濱口梧陵と梧陵文庫」(令和二年七月十八日～十二月二十七日開催、<https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/monjyo/garally/panelx2/index.html>)、和歌山県立図書館松本泰明「濱口梧陵と梧陵文庫」(『和歌山県立図書館だより』第五八号、令和二年 <https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/monjyo/kanko/tayori/tayori58.pdf>)

(47) 「津波防災の日」と長野県」(令和三年十一月十日長野地方気象台発表「長野県とその周辺の地震活動(令和三年十月)」、六頁 [https://www.jma-net.go.jp/nagano/shosai/geppou/document/jishin\\_10.pdf](https://www.jma-net.go.jp/nagano/shosai/geppou/document/jishin_10.pdf)) 令和四年三月十日トクヤス」・首野洋「濱口梧陵文庫」調査 学校で閲覧可と推測・生徒に公開前提収集か」(毎日新聞和歌山版「範は紀州史にありわかやま教育今昔(一〇八)」令和三年十一月十六日)等。なお、「濱口梧陵文庫」以外にも、和歌山県立図書館には「栖原家文書」(表4)等、未整理の郷土資料が存在しており、これらの整理も待たれる。

#### 〔謝辞〕

令和元年度及び令和二年度の「災害の記憶」事業では、湯浅町教育委員会教育課、同町地方創生ブランド戦略推進課、広川町教育委員会、同町企画政策課、稲むらの火の館、独立行政法人国立文化財機構文化財防災センター、新宮市教育委員会文化振興課、同市熊野川行政局住民生活課、印南町立印南中学校、串本町役場産業課、国立研究開発法人水産研究・教育機構水産資源研究所図書館資料館、東京海洋大学附属図書館及び神奈川大学日本常民文化研究所の全面的な御協力をいただきました。また、多くの方に調査及び現地学習会運営で御協力いただきました。末筆ながらここに記して深謝申し上げます。